（版權所有）

明治二十一年六月六日印刷
明治二十一年六月八日出版

通信女學講義錄

第拾卷

每月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

陳言

通信女學第十巻甚だ延刊と相成り申譯無之候本來女學雜誌記者編輯の餘暇を以て手傳ひ致候分も多く有之候處ろ同記者近來腦痛を患ひ雜誌編輯を辛うじて相運び候次第により遂に如此き延引と相成り實以て申譯無之候然し本號限り最早準備中の仕度も相整ひ候に付次號よりは毎月遲くも必ず**十五日**迄に出版いたすべく其以前に出來次第配達可仕候之により今度諸地方の婦人會及び令夫人方に相願ひ多く其の御講究課業書の一ツに用ひられ候樣取計らひ候に付ては向后屹度其間に合せ不申候ては不相成何卒本號の延刊御容赦あつて引續き御信用の程願上候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

志くしゝき格

第一階のしみハ麻行四段と混じ易し

志くしゝき格のしみ

○文學一斑（第十回）

語格（其六）

第十二 志くしゝき格　戀しみ戀しく戀し戀しさ戀しき戀しけれ。悲しみ悲しく悲し悲しさ悲しき悲しけれ等の如く活らく格なるが故にその活用の中なるしくしきをとりて格の稱とハ爲しなり。助辭のまじといふ詞もこの活用の一部に加はれり。ことなる格ハくしき格の條にいへる例にて推しらるべければ細しくハ言ず。この格にて初學の徒の誤りやすきハ麻行四段の活用と混ずることなり。苦しみ悲しみ等ハ此の格にも活らき又麻行四段にも活らくなり。然ど其意おのづから異なれバ必ず區別して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

麻行四段の活用‖のしみ

くしゝき一格

しくしゝき一格

用ゐざるべからず。例ば「秋を悲しみ」といはんに此なる活用にて用ゐるときは秋が悲しさにといふ意にしてしみ‖は第一階のしみなり秋を。のを。は詠歎助辭なり。麻行四段にて用ゐるときは形狀言にはあらずして直ちに悲しみて云々する意なり秋を。のを。は普通の助辭にしてに。に對するを。なりと知るべし

第十三くしき一格第十四しくしゝき一格は前なるくしき第十一しくしゝき第十二の格にて活らくべき詞の少しく活らきかたの異れるを以て一格とはいへるなり。この格は古言に多かれど中古こなたの言語には甚稀なり

くしき一格 善けん‖善けく善し善さ善さ善けき善けき

しくしゝき一格 惡しけん‖惡しけく惡し惡

く—き一格の例證

しく—しき一格の例證

しけさ惡しけき惡しけと活らくなり。承る助辭ハ第一階にてむ。ば。なり即ち善けん。善けば惡しけん。惡しけば等のごとし。第二階以下いづれの階も皆はかの形狀言の助辭とおなじ。第五階連躰言のけきしけきの他にけくしけくと活らくなれど此ハを。と。に。との外にハ接くことなし。こゝの格の例をあげバ古事記上卷伊邪那美命然善けん。と答たまひき」萬葉集一卷ますら男がさつ矢たばさみ立むかひ射る的がたハ見るにさやけし。」同九卷その貌のいつくしけさに花のごと笑てたてれバ云々」同廿卷ふたはがみあしけ人なりあたまゆひわかする時にさき守にさす」

十四種用言活用圖解ハ上件のべたるにて概略つきたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

用言所屬の概畧

第六巻の活用圖と照し合せて思索せバおのづから悟られて惑ふ廉もあからんとハ思へど更にまた用言の所屬をかいつまみて左に辨ふべし

四段の活用の所屬

もろ〳〵の言語を何によりて此ハ四段に屬し彼ハ一段に屬す何ハ何にと一目してその屬する所を知易からんとおらバ凡て第一の音よりず。む。等の助辭およびせ。す。す（使）るすれ、しめしむしむるしむれ（令）れれるるゝるれ（被）等につゞけたると第三の音にる。文字を添ずしてに。を。等の助辭またハ體言につゞけたると第四の音を以てど。どもの助辭へ續けたると飽有ら。ん、飽有り。等のら。り。る。れ。へ續けたるとハ四段の活用に限り又よ。文字を第四の音にくはへずし

一段活用の所屬

四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

中二段の活用の所屬

下二段の活用の所屬

加行佐行奈行の變格および良行四段一格のこと

形狀言

て使令言とするも多くハ四段の活用と知べし。一段の活用ハ單音（着、似、干等の單獨言をいふ）おほく、中二段の活用にハ單音なくして多くハ重音（起、落、恨み、老等の如きをいふ）なるを以てその區別を辨まふるを得。また第四の音を以てず。む。及びて。つ。等の助辭幷びにさせさすさするさすれ（使）しめしむしむるしむれ（令）られらるらるゝらるれ（被）等につゞけ或ハ體言とするハ下二段の活用なりと知べし。加行變格、佐行變格、奈行變格および良行四段一格の如きハ唯一行のみなれバ混ふべくもあらず。而して第五の音に活らくハ加行變格に限り。第二の音のり。文字を以て終止言とするハ良行四段一格に限るなり形狀言にいたりてハ四種ともに區別しやすくして濫

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

係辭の事

係辭は三段に分る

るべきに非ざれバ殊にいはずとも惑ふ條なかるべし

○係辭

係辭とハは。も。ぞ。こそ等の詞をいへるにて或ハこれを指詞ともいふ。指詞といふハ之を標的にして下にて結び止むるが故なり。係辭といふも下の結詞に係屬するの義なれバ稱ハかはるとも其意ハおなじ。歌にまれ文にまれ上の係辭にありて下の結詞の定則あり。その係り結びにて自づから言詞の意もかはり或ハ輕く或ハ重くさま〲に變化すれバ此も亦かならず辨へおかでハ得かなふまじ。さて係辭ハ三段に分れては。も。等ハ終止言にて結びぞ。の。や。なに（なぞ、など、たれ、いかに、いかで、いづれ、いつ、等ハ皆なにの類なり）ハ連體言にて結びこそハ

六

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○は○もの係辭

既然言にて結ぶなり。ば。は事物をさし分てえらぶ詞も。は又といふが如くにて彼も此ものも。に同じ詞なり。この二の詞は係辭の中にて尤も輕き詞なるが故にぞ。の。や。なにこそ等の係辭と重なるときはぞ。の。や。なにこその結詞にて結び止む。

○ぞの係辭

ぞ。も事物をさし分る詞なれど其語勢は。よりは重し。なんといふ係辭はぞ。に同じくしてその結詞も意義も一つなれど多くは文章に用ゐて歌には少なし。

係辭にあらぬ○ぞ

又後撰集三戀無き名ぞ。と人にはいひて有ぬべし古今集秋上名に愛て折るばかりぞ。なと云るぞ。は係辭とは異にして此は言とゞめたる詞なり。

○のの係辭

の。は。が。とおなじ類にしてその結詞も意義も亦おほむね異なることなし。此故に聲の。聞ゆる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○の○とが○との事

係辭にあらぬの○

○やの係辭
○かの係辭

語尾に置くや○

といへるを聲が○聞ゆると譯し、梅が○枝ハ梅の枝、萩が○花は萩の花と譯して能その意を明了にすべし。凡て體言と體言との間にあるが○ハの○と譯し體言と用言、形狀言との間にあるの○ハが○と譯すれバ違はず。春の花、秋の月などの類のの○ハ係辭のの○とハ異にして接續ののなり。や○ハ疑ひの詞にてその結ハ連體言なりか○もや○と同じく疑ひの意ありて連體言の係辭となれり後撰集に「今年も今日にはてぬとか○きく○（きくハ四段の活用第四階の連脉言なり）といへるが如し。又や○文字を終止言にそへて聲ハ聞ゆや○思ひいづや○など云るあり。此ハ問ひかけて止めたるなれバ係辭にハあらず。このや○ハ必ず終止言を承べきに初學の人ハ誤りて聞ゆるや、出るや

八

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

語尾に置くか。

なにの類の係辭

などて連躰言より承ることと多し。單音の言をうくるときは殊に誤りやすし得や。經や、來や。といふべきを得るや、經るや。來るや。と云り。もし連體言を承て疑ひ止めんとならバか。を用ゐて聞ゆるか、出るか。といふべきなり。なにの類の係辭も連躰言にて結ぶなり。なにの係辭とその結詞との間にはやこそを置べからず。但しぞ。の。が。か。等ハ置も妨げなし。そハたれぞ。思ひ出る。いく度か。來る。など鹿のなく。など云どたれや。思ひ出る、いく度こそ來れなど言ことなけれはなり。又か。ハ古今集戀四たが里に夜がれをしてか。時鳥たゞこゝにしも寐たる聲する。といへる如くたがになにの類なりの下に言をへだてゝ置ことあれどぞ。ハ言を隔てハ置

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

係辭にあらぬぞ。

こその係辭

呼出しのこそ

ず。然のみならずなにの下にぞ。を置ハ何ぞ。誰ぞ。等のはかにハ少なしいく世ぞ。たが子ぞ。など用ゐし例ハ多かれど此ハ言止めたるなれば係辭のぞ。とハ別なり。又たれも。なに事も。などいふ類ハ疑の詞ならねバも。文字が係辭となるなり。されバその結びにハも。の方の結詞を用ゐるなり。

こそハ此其といふが如き意にてぞ。よりハ一層きびしく物事をさし分る詞なれバ係辭の中にて尤も重し。枕草子なる「我が君こそまづ物きこえん」。水鏡なる此こそハ昨夜もて坐したりし鈴よ」など云るこそハ呼出す詞にて係辭にあらず。よ。文字ハ照應にそへたるなり。さて上に列ねたる係辭の中にてなにハ言語のうへにわりの。ハ體言を承

一〇

けが。ハ體言および用言、形狀言、助辭の連體言を承く。その餘の係辭ハ體言よりも用言、形狀言、助辭の連用言、連體言よりも活かざる助辭よりも接くなり

第九卷文學一斑正誤　廿二丁七行細書あるとも。ハあるをも。ノ誤〇廿三丁十一行よ。れよ。ノ誤〇廿五丁十一行るりて。ハなりて。ノ誤〇廿九丁一行此ノ傍訓こと。ハこゝノ誤〇同四行細書ノ下例ノ字ノ上ニ又上にが。の。等の係辭あれバその結びともあるなりノ廿二字を脫す〇同五行身の。ノのノ右傍。を脫ス〇同六行同七行が。ノ右傍。ヲ脫ス

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

米國大統領ガーフヒールドの母

賢母の敎養茅屋の中に米國大統領を產す

賢夫人ガーフヒールド女史の傳女學雜誌第百十一號に見ゆ

一二

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

痙攣の原因

飽食の爲めに發る痙攣の取扱方

〇育兒心得（第十回）　船越鼎太郎講

問。赤子の痙攣ハ如何なるとより發るものに候や、承りたく候。

答。赤子ハ、神經に感動し易きものに候へハ、色々の原因より、痙攣を發すものにして、就中、未た齒も生へさる赤子に、菓子杯を與ひ、飽食をなさしめ、或ハ母親の妄に手療治を行ふに由り、之れを起すもの多く、其他、生齒期の刺戟百日咳等に由て、發るものに候。

問。飽食の爲めに、痙攣の起るものにハ、如何致候てよろしかるへきや。

答。母に乳汁の澤山之れあり候節ハ、別に赤子に、食物を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

百日咳及生歯期に發る痙攣の取扱方

與ふるに及ばぬ筈なり、殊に、歯の生へざる前には、赤子の胃にて、澱粉質の食物を消化べき力、之れなきものに候へば、謾に、食物を與ふるは宜しからず、又妄に、賣藥の類を用ひ、或は灸治を施すは、反て害と相成るとに候、飽食の爲めに、痙攣を發したる時は、先つ、食物を吐き出さしむることを務め、而して、温湯に浴せしむるは、大に效あることに候、既に、食物の下腹に下るものには灌腸を行ひ、或は、蓖麻子油、一茶匕づゝ、通しのある迄、四時間毎に、用ひらるへく候、

問。百日咳及生歯期の刺戟によりて、痙攣の起るものには、如何致候て、宜しかるへきや。

答。痙攣の、百日咳より發る時は、不取敢、顔面に冷水を灌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

秘結預防法

き、温湯に浴せしむるを、第一と致候、又生歯期の刺戟に由て、之れを發するものにハ、歯齦を截りて、其歯の現れ出つるを、容易に致さるへし、此等の儀ハ、醫師に依頼せらるゝ方安全のことゝ存候。

問。赤子の秘結することを、豫防する方法、之れあり候ハヾ、承り度候

答。赤子の養方、戸外の運動、身體を清浄にするか如き、一般の養生法に注意すへきハ勿論、其他殊に御心得ありたきハ、全身浴を行ひ、其時、海綿若くハ手拭に、湯を充分に浸し置き、赤子の腹部に注き懸くることゝ、便道の有無に關らす、時を定めて通利を試むることに候、赤子に乳を哺まする

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にも、時を定むれハ、通利も自然と、一定の刻限にあるものに候へハ、始めハ煩ハしきも、遂にハ大に便利と相成るものに候。

秘結療治方

問。赤子の秘結にハ、如何なる療治、最もよろしく候や。

答。赤子に下劑を用ふるハ、宜しからぬことに候、之れを數々用ふる時ハ、益々、秘結の癖を殘し、下劑を用ひされバ、決して便通なきに至るものに候

秘結取扱方

問。然らハ、如何取扱ふへく候や。

答。赤子の眼の覺めて居ることを五月蠅思ひ、只管平臥して、眠らしめんことを務むるハ、宜しからぬことに候へハ、或ハ抱き、或ハ負ひ、或ハ育兒車抔に入れて、身體を運動

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

灌腸

せしめらるべし、之れに由て、多くは秘結を防ぐとを得るものに候、若し秘結を發したる時は、砂糖、砂糖湯の如きを、單に試み、之れにて便通なき時は下劑を用ふるよりは灌腸を行ふ方、安全なることに候。

問。灌腸とは、如何なることにして、如何致して行ふ者に候や、御説明下されたし。

答。灌腸とは、之れを行ふ爲めに作つたる器械あり、之れに由て、水或は藥汁を、肛門より灌き入るゝとに候、赤子には、通例の灌腸器を用ふるよりも護謨球の附きたる、水喞を用ふるを便利と存候、秘結の時には、冷水、蜂蜜に湯を混したるもの、砂糖湯、石鹸を湯に溶きたるもの、如きを、灌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

風氣

腸料として、用ひらるへく候。

問。風氣の原因や、其取扱方に付き、承り度候。

答。風氣と申すハ、腸の中に、瓦斯の滯りたるものにして、之れを鼓脹とも云ひ、腹ハ恰も太鼓の如くなり、打てハ、鼓音を發し、打たざるも、腸中の瓦斯動く時ハ、雷鳴を聞くものに候、此病の赤子に發るハ、主に人工の食物を與ふるに、由るものなれハ、産后五六ヶ月の間は、全く母の乳汁のみにて養育するとは、第一の豫防法に、之れあるへく候、若し、母の乳汁にて、養育致し難き場合にハ、注意して、牛乳を用ひられへく候、斯く用心致候ても、風氣を發したる時にハ、沸騰散、カミツレ花の振り出しを用ちひ、帝列並油を腹部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

赤子の消化不良症

に塗擦らるへし若し劇く苦痛することあらハ温浴を行ふへし斯くすれハ概ね直に軽快するものに候。

問。赤子の消化不良ハ如何にして相解り候や。

答。第一赤子の乳汁を吐くことに候尤も健康なる赤子も乳汁を多量に呑みたる后にハ之れを動揺せしむる時ハ勿論静に致し置く時にても乳を吐くことありされから多量に乳を呑まさるに之れを吐くとあるハ消化不良症か驚風と云ふ病あるかに由るへく候其外下痢を發し大便を始め緑色若くハ褐色なれとも后にハ水瀉を發す又腹部ハ風氣の爲めに甚しく膨れ其れか爲めに腹痛を發すとあり腹痛を發す時ハ氣六ケ敷なり下肢を屈め

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

消化不良症の元因

て劇しく吐き、其の吐くを、鎮めんとして、乳房を口内に入るれハ、頸を振りて、之れを呑むとなく、増々叫鳴を以て察せらるへく候、本病ハ、驚風と云ふ、恐るべき病に類し居るものなれハ、必ず御用心なさるへく候。 二〇

問。赤子の消化不良ハ、如何なることより起るものにや、承り度候。

答。赤子ハ、如何なるものより滋養を取り居るや、之れを穿鑿するハ、最も肝要のとにして、即ち母親若くハ乳母の乳汁を用ひ居るならバ、月經の來り居ることなきや、精神に甚しき感動を受けたるとなきか、酒類を嗜み、或ハ劇しき藥劑を用ひたることなきやに注意し、牛乳或ハコンデン

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

スミルクを用ふるものならば、其調合宜しきを得ざることなきや、牛乳若くハコンデンスミルクの腐敗に傾き居らさるや、吸乳瓶の洗淨不行届にあらさるや、或ハ菓子の如き(乳汁にあらさる)食物を與へたることなきや、又夜間裸體となり眠り、腹部を冷やしたることなきや、此等のことを吟味すれハ、大概、其原因を索り得るものに候。

問。本病と、驚風と相類し居るとのことなれハ、決して油斷ハ致す間敷く、且つ手療治も覺束なく候え共、豫防法、及看病の仕方ありとも、承り置度候。

答。本病ハ赤子に甚た多き病に候へハ、原因を精く申上置き候、其原因となるへきものを、豫て御承知致し置かれ、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

御攝生なさるゝハ即ち豫防法に候、輕きものにハ、重炭酸曹達或は炭酸麻屈涅矢亞等、效あることも、之れあり候、腹に痛あるものにハ、温湯に浴せしむれハ、之れを緩解せしむへく、又新きフランネルの切れを、二三枚厚く疊み、之れを温湯に浸し、稍や緊く絞り、之れにて赤兒の腹部を包み、尚は其上を、干きたる氈子にて卷き、二時間以上も蒸すハ大に效あるものにして、殊に臥冷、寒冒等より起りたる時に、よろしきものに候。

三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

利尿のと

○女子生理　（第十回）

船越鼎太郎講

第二章　懐妊の事　（其八）

膀胱ハ子宮の前にあるものなれハ子宮の大きくなる工合にて色々の症候を現すものなり胎兒の頭尿道を壓し附くる時ハ尿を通ずるに困難となり或時ハ辛ふして小量を漏らし或時ハ全く通ずること能ハず又子宮の大きくなりて膀胱を壓し附くる時ハ大に其容量を減し小量の尿と雖之れに滯め置くこと能はず頻りに尿意を催すとあり又姙娠の末期に至れハ此の感覺益ず甚くなり歩行を致し腰を屈め咳嗽噴嚔等をする時に覺へず之れを漏すことあり其重きものハ格別身躰を動さゝるも之れ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

失神

よ堪ゆるの力なきとあり。
尿の通すると、宜しからさる時ハ、靜に運動をなし、又尿意の有無に關らず、大概四時間毎に、利尿を試むへし、又利尿せんとするとき、下腹を兩手にて、持ち擧ける様にすれハ、快く通することあり。
頻りに尿意を催す時ハ、灌腸を行ひ或ハ蓖麻子油一食匙位を用ひて、便通を得へし、其他、患者ハ酒類を禁し、安靜に身體を保つと肝要なり、妊娠の末期にハ、覺へず尿を漏すことあるも、格別恐るゝに足らず、出産するの後ハ自ら治するものなり。
纖弱婦人ハ、妊娠したるか爲めに、時々氣の遠くなるか如

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

く覺ひ、或ハ眞に失神とあり、之れ子宮の大きくなるが爲めに、神經及血管の、大幹を壓し附くるに由るなり、姙婦の失神とあるも、實に其患者に、心臓病あるにあらされは、大概恐るゝに足らさること多し。

姙婦若し、氣の遠くなる樣に感したる時ハ、枕をなさずして仰臥すへし、之れ頭部に、血液の流れ來るを容易ならしめんか爲めなり、患者若し、帶、紐、纈草、裩抔にて、腹部を緊く縛り居ることあらハ、之れを解き緩め、戸を開き、空氣の流通をよろしくし、顏面に冷水を注き、酒類を飮ましむへし、正氣に復したる後ハ、淡白滋養物を取り、朝は早く起き、時々運動を試み、空氣の流通宜き室の中に眠むるへし、其

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

心臟の動悸

痙攣

他醫師の命令に順て、強壯劑を用ふへし。

柔弱婦人ハ、妊娠中に、心臟の動悸劇く、之れよ苦しむことあり、斯く動悸の劇くなるハ、子宮大きくなりて、血管を壓し附け、血液の循環をわしくし、一時心臟の作用を妨くるに由るなり、故に褥に臥す時ハ、益々血管を壓し附け、加ふるに、大きくなりたる子宮ハ、胸の方に壓し上り、彌々心臟の作用を妨け、動悸を劇しくするものなり、併し、妊娠の爲めに、動悸の起るハ、格別恐るべきことにあらず。

心臟の動悸劇きものハ、精神を安靜にし、身體を疲勞せしむることを謹み、戸外に出でゝ、適宜の運動を行ふへし。

妊娠の末期に至れば、子宮大きくなり、神經を壓し附け、之

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

白帶下

れか爲めに股或ハ脚脛等に痙攣を起すとあり斯る時にハ痙攣の起り居る少し上部を手拭にて暫時緊く縛り置き(決して縛りたるまゝ久しく置くと勿れ)或ハ手掌にて擦するへし若し背部腰部腹等に痙攣を起す時ハ食壚或ハ砂を熬り之れを綿布の嚢に入れ或ハ石瓦の類を燒きて温石とし或ハ懷爐湯タンポの類を用ひ或ハ蒟蒻を煮て之れを患部に當てゝ温むべし。

姙娠中婦人の白帶下に罹るハ甚た多きのみならず姙娠して居らさる婦人も之れに悩むもの實に世間に寡なからず而して本病に罹る婦人ハ姙娠し難きを以て玉兒を擧くることも稀なり又此病より惡ふへき子宮實質炎を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

來たし、或ハヒーステリーに陷り、世の無情を悲む等、實に婦人の不幸限りなしと云ふへし、故に今茲に、姙娠中に發る、白帶下のみならず、一般のことに關り、聊か詳論すべし。

白帶下ハ、色白く、頸長く殊に頸部抔に瘰癧のある人、衰弱したる婦人、又ハ濕地に住するものに多し、本病の原因ハ、寒冒に罹り、或ハ月經、姙娠の時、或ハ産後に攝生宜しからさるに由り、或ハ産後、小兒に乳を與へさるに由るものなり。

此病に罹れハ、水の如き下り物を絶へず漏らすのみならず、時々月經の如く、多量に排るとあり、之れか爲めに外陰部、内股まても、糜爛、不潔なる人は、一種の臭氣を發すると

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

あり、白帶下の色時として黄色、綠色、或ハ溶解したる海蘿の如くなるとあり、其量多くして、久しく續く時ハ、身體衰弱し、呼吸不利、心悸興進、消化不良、頭痛、眩暈を發す、又月經を見ること數日に瀰り、或ハ月經を見る可らさる時に、子宮より出血す、或ハ身體彌々衰弱に陷り、月經を見さるに至るとあり。

婦人此病に罹るも、自ら適當の治療を施すことを得す、又醫師に治療を乞ふことなく、秘密に致し置くか故に、彌々病を重くするもの多し、又醫師に治療を乞ふも、當今日本の有樣にてハ、身體の造構をも辨ぜず、婦人科の診察法をも、知らざるもの澤山なるを以て、適當の療法を施すと能

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はさる場合もあるへく、又之等のとに自ら任する醫師あるも、患者固く辭して、充分の治療を乞はさるとあるより、此等の病を益々重くし、或ハ他の重病を引き起し、一生涯の不幸に陥ることあるハ、悲みに堪へさる所なり。

身體の衰弱したる人ハ、鉄劑等を用ひ、瘰癧ある婦人ハ、肝油を用ひ、濕地に住する人ハ、地を轉すへし、其他滋養物を食し、新鮮空氣を呼吸するか如き、一般の養生法にも注意すへし、此病の姙娠中に起り易きハ子宮大きくなり膣壁を壓し附くるに由るものなれハ、迎き臥して、之れを防き、或ハ夜間早く寢ぬるも、大によし、又子宮の壓迫を緩むるにハ、カルヽス泉鹽十五グラム（半オンス）を服し、便通を善

三〇

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

くすへし、月經出産等ある時ハ、攝生を大切にし、本病を豫防すへし。

白帶下を發したる時ハ、洗滌して清潔にするを第一とす、即ち全身浴、或ハ脚湯を行ひ、若し又轉地療法を行なはんとならば、海濱或ハ温泉に至り、浴用子宮鏡と云ふて、硬護謨若くハ木材にて製し、數多の小孔を穿ちたる、筒を用ひて入浴すへし、其他、ヰルリガートル、或ハ子宮洗滌用の水喞を用ひて洗ふへし、之れに用ふる洗藥ハ、種々あれとも、素人に最も便利なるハ、百倍位の明礬水にて、朝夕洗滌すへし、又下り物、甚た多き時ハ、明礬水を綿（曹達水にて煮て脂を脱りたるもの最もよし）に侵し、絞りてつめものとなすへし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

外陰部の刺衝及瘙痒

妊娠中、外陰部の刺衝及纖癢ハ、纖弱婦人に發り、殊に妊娠の末期に多し、此病ハ瘙癢甚きを以て、爪にて破り、血を出たし、或ハ疼痛劇しく、下り物頻りとなり、利尿の際ハ疼痛更に加はり、頗る苦惱を感するものなり。

辛物或ハ鹹き食物を食するハよろしからず、微温浴若くハ食塩浴の坐浴を行ふと妙なり、食塩浴を行なはんとせは、食塩五勺斗りを盥の中に入れ、之れを水にて溶し置き、而して熱湯を其上に灌ぎ、微温湯となし、腰部のミを盥の中よ入れ、足も胸の邊も浴中に入るゝことなく、肩より毛布の如きものを被ひ、寒冒を防き、一分時間計り浴すべし、之れに由て瘙痒と疼痛を緩むるものなり、又硼酸二分、と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ワゼリン十分との割合にて研和て製したるものを塗り附けるも效あり、但し之れを用ひたる時は、十二時間毎に、炭酸加里を加へたる、坐浴を行ふへし、白帶下の爲めに、本病を來たしたる時は、前に述へたる療法を行ひ、つめものをなして、下り物の流れ出でゝ、患部を汚さゞる樣にすへし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○百人一首講義

鈴木弘恭述

第二回

八木鶴二記

中納言家持

是はチウナゴンヤカモチと讀むべし。大納言大伴宿禰旅人の子なり。光仁天皇の御宇に。從三位中納言となり。桓武天皇の延暦元年に陸奥按察使鎭東將軍に任ぜられて陸奥に下り。延暦四年八月任國に在りて薨じたる人にて。父子ともに詠歌の道にすぐれたる人であります。

かさゝぎのわたせるはしにおく霜の白きをみれば夜ぞふけにける

此の歌は新古今集にのせたり。古へよりさま〴〵の説あれど。さほどにむづかしくいふには及びません。禁中に宿直したる曉天に御階の邊に置きわたしたる霜の白きを見て。寒夜の實景をよまれたのであります○かさゝぎは鵲之。かさゝぎのわたせるはしとは。鵲がわたしたる橋といふ義にて。かの淮南子に烏鵲塡河成橋といふ意を取りて。殿上に登る御階をいへる之。禁中を雲上といへば。雲の上へ渡せる階あるを以てかくいはれたのであるが。甚だ面白く巧みなる趣向であります○一首の意は。殿の御階に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

置霜の白いのを見れば夜が深けたことであるが。さてこそ今夜は寒かりしか。と天清く氣爽なる曉の景を述たる也。因に申しますが。夜ぞふけにけるのふけといふ言は。加行下二段の言にて。物の積りてくることであります。則ちふけといふもふかといふも同じことであるから。深といふ字をかきてふけともよみます。川が深い。雪が深く降りたといふも。水や雪の積りたる上をいふので。人のふけたといふは年の積りしこと。夜のふけたといふは初更よりだん〳〵と更の積りしこと也。又たかと云ふもたけと云ふもふかふけと同しとあれど。是は下の瀧の音はと云ふ歌の條にいふべし。語格は一段切れの歌也。夜ぞといふぞが指辭にて。ふけにけるといふにけるにて結べる格であります。

安倍仲麿

仲麿は中務大輔船守の子也。元正天皇の靈龜二年。大伴山守を遣唐大使と爲し。多治比縣守を押使として唐に往しめ賜ふとき。安倍仲麿も隨行せるなり。さて孝謙天皇の天平勝寶四年。遣唐使藤原清河唐に往き。翌年。清河歸朝の時。仲麿も共に歸らむとして。船にのりたれど海上颶風に逢ひ。仲麿の船は安南に漂泊し。遂に歸る事を得ざりし也。さてその歸朝せんとする時。唐朝の名臣。李白。王維。包佶。など明州と云

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にて餞別せしに。仲麿此の歌を詠じて。漢字に譯して是を示せるとぞ。さて仲麿は唐朝にありては。名を朝衡と稱しましたが。とう〳〵彼の國にて卒去られました。

天の原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

此の歌は。萬葉集にも古今集にものせたり。仲麿が明州にてよめる歌にて。青海原ふりさけみれば。とあるを。此所は天の原と改めし也〇天の原とは。大空のこと也。はらはひらと同じことにて場所の廣き所をはらともひらとも云ふなり。則ち廣き空を天はらといひ廣き海を海ばらといひ。廣き野を野はらといひ。廣き田を田はらといひ。川の廣き所を川はらといひ。篠のありて廣き所を篠はらといひ。草の茂りて廣き所を草はらといひ。松の生じて廣き所を松ばらといふ。初學のもの松ばらとは松の疎々あるゆゑなりと思ふは。大まちがひであります。人體のうちにても一ばん廣き所をはら(腹)といひ手足の廣き所を手のひら足のひらといふも同じことであります〇ふりさけは。ふりさうらせにてふりは添ていふ言也。添詞は言をつよめていふ時あるは用ゐる例也。さうらせは放也。遠望する時には仰向てみるもの也。これを振放て見るといふ。物を放して見ること也。〇かすがは大和國の春日也〇なるは＝アルを約てナルといふので春

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日にある三笠山といふ義なり〇かものもハ詠嘆辭といひて意なし。俗に感心したときにオヤマアなどいふマアといふ義也〇一首の意ハ。大空を仰ぎ見れバ。あの月ハ我が故郷の春日にある三笠山にいでた月影のやうであるヂヤア。どうもなつかしい月影であるよ。と故郷を思ふ情をのべたり。唐詩にも擧レ首望ニ山月一低レ頭憶ニ故郷一といふがありますが。此の歌ハ故郷を思ふといはずして。其の情が言外にあらはれてあるから彼の唐詩よりも遥かに優りてあるやうです。すべて歌にても詩にても哀しいといはずして悲しく聞え。樂しいといはずして樂しく聞ゆるのが。名人佳作のしるしであります。語格ハ一段切れの歌にて指辭なし。故に月かもといふかもハ徒の結びの格であります。

喜撰法師

此の人ハ家系がたしかに分りません。或ハ橘奈良丸の子也。或ハ形部卿名虎朝臣の子也。古今集の序。千載集の序にも。宇治山の僧喜撰とありますから。宇治山に隱遁してゐた僧と見えます。故に歌も多く傳ハりません。鴨長明が無名抄に御室戸の奥に二十餘町ばかり山中へ入て。宇治山の喜撰が住ける跡あり。家ハなけれど石塔などさ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

だかにあり。これを尋ねてみるべしとあれバ。古へよりかくいひ傳へたことと見えます。

我いほハみやこのたつみしかぞすむ世を宇治山と人ハいふなり

此の歌ハ。古今集にのせたり。格別にかくれたる所なき歌であります○いほハいへと同じ。文字より庵家とかけど波行四の音のいへと云ふを。五の音に轉じていほといふまでなり。○たつみハ。東南の方ゑ。北を子とし。東を卯とし。南を午とし。西を酉として。方位を定めたれバ。子丑寅卯と十二支を順に繰る時ハ容易に知らるべし○しかぞすむハ。しかハ然ゑ。此の如く住むといふことゑ○一首の意ハ。私の庵ハ京都の辰巳の方角に當り。則ち東南の間の山に此の如く住みて居ります。ソレヲ世を憂い山であると世間の人ハいひます。愚僧の心にハ一寸も憂いとハ思ハないで至つて安樂でありますよとゑ。憂きといふべきにうをいひかけて。世をうち山などいふハ詠歌の常にて。人に逢ふを。逢阪の關にいひかけ。人を待つに松ほの浦をよめるが如し。皆かやうの例ゑと知り給へ。さて語格ハ二段切れの歌にて。三の句のしかぞすむといふぞが指辭にてすむといふ言にて結びて切れたり。又五の句の人ハいふなりといふハ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

が指辭にてなりといふ辭にて結びたる格であります。

小野小町

家系詳ならず。或云出羽の郡司小野貞實の女なりと。或云此の女小野貞樹とよみかはせし歌あれば。貞樹ハ小町の親屬にて近江の小野より出たるならん。などいろ〳〵の説もありますが。確かに是れとも定めかねます。しかしながら何れにもあれ小町ハ采女ならんと存じます。采女ハ當時專ら諸國より奉ることにて。國々の郡司の女などの容儀よきを撰みて奉る例であれバ。小町もそのうちの一人でありましやう。時代ハ縣居翁の考への如く文德天皇より淸和天皇頃の人であります。俗説に小町ハ後に零落して乞食の如くになりし人なりなどいふを實事と思ふ人もあれば。今縣居翁の説を左に掲て俗説の取るに足らざることをしめしましやう。但し縣居翁とハ加茂眞淵といひし和學の大先生で。今より百十餘年前に死去し人であります。

眞淵云。小町ハ歌の達者なり。女の歌ハ今の京（桓武の朝を云ふ）此方に及ぶ人なし。伊勢の御も名高けれども小町にハおとりたり。此人名譽あるを以て。後世に至り小町物語といふ物を作りなせしが（此の作者は知れ難し）。その物語に老て貧しくなり。又

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

屍は八十島にありて。薄生て。風吹けばあなめ〳〵と音せしなどゝ。おとなき事のみをかけり。此頃までは道路に死たる人あれば。其本國を問求めて引渡し。本國の知れざるは。假り埋葬して。札を立て往來に問せられし令法也。かゝれば屍の棄て久しきは國司の怠りなれば。必ずさる事なし。又老ひて乞食に成しといふも。いにしへを知らぬなり。此頃は年七十になれば。侍者とて人をたまはり。養ひたまへれば。いかなるかたは者にても。食物などは朝廷より賜はりて乞食者はなかりし也。まして孫あれば。子ありしともとよりにて。いかで朝夕養ふ人なからんや。皆古への法令を知らぬ。人のよからぬ作りごとなり。

弘恭云。小町が孫のとは。古今集。後撰集に。小町が姉云々。小町が孫云々。などあるによりていはれたるなるべし。此の外にもまだいろ〳〵の説がありますが。大かた大同小異であれば省きます。

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

此の歌は古今集にのせたり。世ながらふる身は。もの思ひが多くて。歎息しつゝ月日を過す間に春の花盛りもすぎしさまをいへる也〇うつりは。うつろひと同言也。人

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の轉居するをもうつらふといふなり。花のいろのうつらふは。盛りより衰枯の方へ移りゆくと之〇いたづらは俗ムダ之〇よにふるは。世に經ると雨のふるを兼ていふ之〇ながめは。淋雨と長見を兼ていふ之。心にもの思ひのある時。空を仰きてゐるを長見といふ之〇一首の意は。花の色はうつろひてわろくなつてしまつたナア。ムダに我が日數へつゝ淋雨の爲てゐつた間にといひて。我が紅顏も衰へてしまつたナア。ムダに我身は經世のとにつきて。我が心に任せぬを歎息してゐる間にといひて。移りやすき世の無常を歎げける之〇語格は。一段切れの歌なれども二の句のにけりなにて切れて。さて五の句のながめせしまにといふより又上へうちかへして花の色はと續く格であります。

蟬丸

家系詳ならざれども。醍醐天皇の頃の人であります。或は敦實親王の雜色なりしともいへど。是を延喜帝の皇子之。或は仙人之。或は盲人之。などいふは皆甚しき誤謬であります。此人琵琶を好み其の秘曲を得て。遂に世を遁て逢坂の關の邊に住して常に髮を剃らずして居りましたから。知らぬ人は仙人之とも思つたと見えます。また後撰集

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に。此の歌の詞書に。相坂の關に庵室を作りてすみはべるにゆきあふ人をみてとありますれば。此のみてとあるよて盲人ならぬとは能く知られます。又或說に琵琶を愛せしには非ず。和琴を彈じたる之。ともありますが。蟬丸の像は皆琵琶を抱けるところなれば。琵琶を愛したるに相違ないやうであります。

これやこの行くもかへるも別れては志るも知らぬもあふ阪のせき

此の歌は後撰集にのせてありますが。後撰にはわかれつゝとあり。いづれよても大意は違ひません○これやは。コレヨ之。かやうのやは指辭に非ず。俗言のヨに同じ○別れては云々は。此の關にては知る知らぬ人皆別れ。また知る知らぬ人皆あふとの意之○あふ阪のせきは。京と大津との間にありて。京より東國に往來するには。必す此の關を通行します。さてあふ阪といふ名を人に逢ふとにかけて詠れたのであります○一首の意は。これよ此の他國へ行く人もまた京へ歸る人も。知る人もしらぬ人も。皆この關を出れば各別れ〳〵になるとであるが。さてまた知る知らぬ人が落合て逢ふのも此の逢阪の關であるよと之○語格は。一段切れの歌にて。あふ阪のせきと結べるは。あふ阪の關ありといふ意にて。則ちなりといふ言を添て解する例之。さて行くもかへる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も。知るも知らぬも。といふやうに二つ重なりたるもは。甚た輕くある例にて。徒と同様のもでわります。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

温熱を運ぶ一つの元因の事

水は火の當て様によつて其熱するに相違ある事

○家內理學（第七回）

第六章　動躰が温熱を運ぶ事

扨て又た、温熱が他に傳はり行く多少の元因に付ては、更らに一つの考ふべきとあり、即ち、流動物にせよ、若しくは、瓦斯躰にせよ、其の物躰が、自由に動き廻はるとの出來るものなれば、之が爲めに、其の温熱を運び廻はるとも亦た少なからず、左れば、此の動き行く動躰の爲めに、温熱の氣を運ばるゝと云ふとが、更らに一つの元因とはなると也。

今ま、其一例として、手近き事を申せば、圖の如き細き管に、水を入れ、之を斜めにして、其の上に傾きたる一方に、ラム

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

プの火を當るときは、其の火の當りたる一點より上に在

る水は、直ちに熱して蒸氣を發し、速やかに煮え立ちて、外に蒸し上るべし、然るに此の一點より下たに當る水は、其の甚ハだ之に接近するにも係はらず、少しも温まるとなきのみか、圖にも示す如く、管の底に置いたる氷は、久しく溶くるとなくして、其儘に殘る程ならん、然るに、之に反し、若しランプの火を此の管の底に當つれば、本來少々の水の事ゆへ、直樣煮え立ちて、全躰悉く熱し、彼の氷は、一分間も其儘には殘るとなかるべし。火の當て處ろによつて、斯樣に甚はだしき相違のあるは、何故ぞと云ふに、即はち、前には水が動き

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

水熱するとき上に登る有樣の事

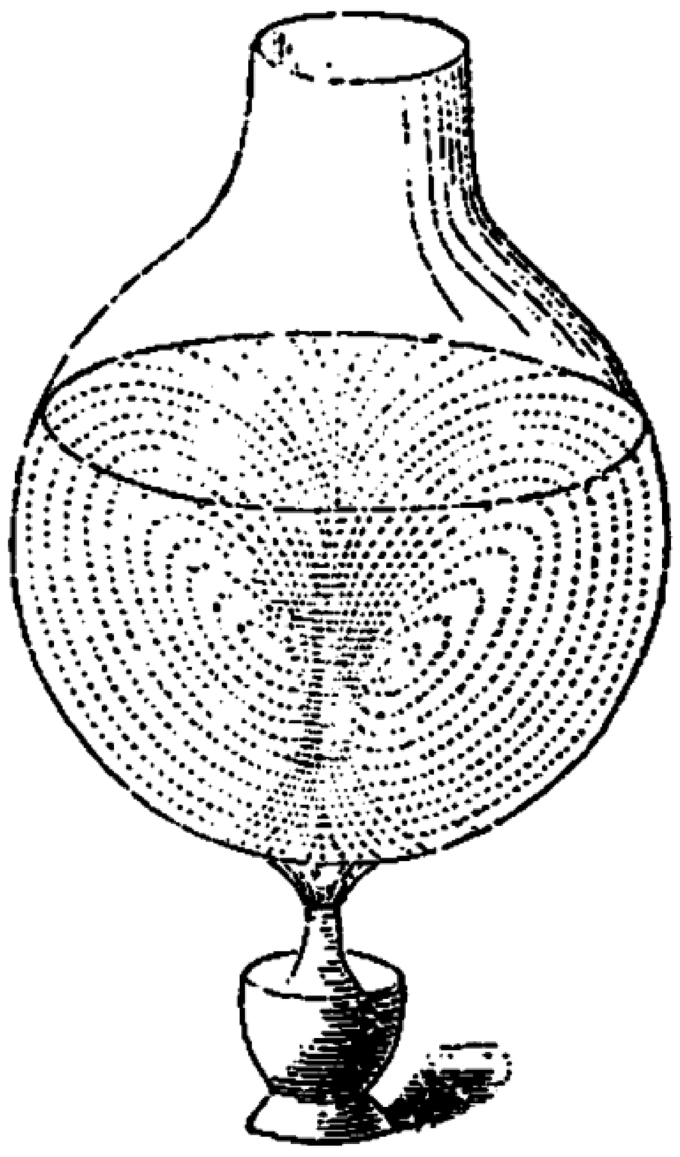
廻ることが出來ず、後ちには水が自由に動き廻はりて、所云る動躰が温熱を運ぶと云へることを行ひたるの故と知らる。

其を何故ぞと問ふに、第二の仕方の如くにすれば、底に於て温ためられたる水は、直ちに上に登り、冷やかなる水が、其代はりに底に來り、一つは上に行き、一つは下に來り、廻り〳〵て温熱を運び廻るが故に、扨ては斯の如くにも早く熱することとなり、今ま其の有樣を確かに知らんと欲せば、圖に示す如き、何か丸ろき硝子の器に水を盛り、其の中へ、青き繪の具一と塊まりを落せば、其儘沈んで底に落るならん、斯て此の器の底に、例の如く火を當れば、底に在つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

空氣と水と皆な如斯なる事

たる水は、直ぐに温ためられて段々と上に登る、其の登りたる跡には、左右前後の冷たき水が入れ交はり來る、來つて温ためられて又た登る、登るその跡に又々左右前後の水が



來る、斯樣にして上へ行き、下に降る、器の内の水の運動巡環する有樣は、彼の底に沈んだる青繪具が、少しづゝ溶けて、青き流れを、上に登る水と共に登ぼし、又た下に降る水と共に降だすによつて、明白に知らるべし。

而して、空氣も亦た、斯の如く温ためられたるもの上に登り、冷たきもの下に降り、其上下回轉の止まざるが故に、即はち其の熱せらるゝとも、亦た速かなり。左れば、空氣の如

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

き瓦斯躰にせよ、又た水の如き流動躰にせよ、其の物躰が自由に動き廻はるとの出來るものなれば、其の温熱の運び廻はらるゝとも、亦た莫大にして、決局、其の全躰に温熱の傳はると、甚はだ速かになるなり、風呂の水が、上より温かに成りて、段々と全躰を温たむる如き、若しくは、ストーブを焼きたる部屋が、先づ上の方より段々と温たかに成るの類、皆な此の理なり。但し、空氣の斯の如くにして温ためらるゝの景狀は、後の回、部屋を温たむるの條に於て、更らに講述すべし。

○

第七章　温熱の性質並に効驗の事　(上)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱によつて固形物が流動躰となる

凡そ何物によらず、温熱を受くるときは、其の形ち大きくなるものなるが、然し温熱を受くるときは、啻に形ちの大きくなるのみならず、其の物の形状も、亦た全たく一變するものなり、即はち、温熱の爲めには、何如に固たきものも軟らかになり、遂には殆んど流動躰の如きトロ〳〵の者と迄に成るべし、尤とも只だ炭と純粹の礬土とは此の變化を蒙むることなけれども、其外の物は、大抵之れを免るゝと能はず、而して、其の流動躰と變化する迄には、或ひは甚はだ長き時間を要するもあれば、亦た乍ちにして左樣に成るものもあり、即はち、氷は之が爲めに直ちに流動躰となれども、鐵鋼なんどの左樣に成る迄には、隨分

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

溶化點の事

に時のかゝるもの也。
扨て、右の如く其の流動躰に變化するには、物によつて速し遅しの相違あり、依て、此の流動躰に變化する程どの時を之名けて、其の物躰の溶化點と申す、英語に所云る、メルチング、ポイントと云へる義なり、而して、此の溶化點の遅速は、即はち寒暖計によりて測る、例へば、燐は百八度にて溶化し、蠟は百四十二度にて溶化し、硫黄は二百二十六度にて、砂糖は三百二十度にて、錫は四百四十二度にて、鉛は六百十二度にて、亜鉛は七百七十三度にて、銀は千八百七十三度にて、金は二千〇十六度にて、鐵は二千八百度にて、初めて溶化するが如し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(注意)いろ〳〵の物躰の溶くると、斯の如く夫々に相違するものゆゑ、例へば、一つの湯わかしを製するにも、余程の損益あるものと知るべし。

五二

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

空氣の存在を證する更らに一つの方法の事

即ち冷熱によつて之を知るの事

○地文學講義

第四回　空氣

第二章　空氣の冷熱

空氣は目に見へざれども、其の微風となり、強風と爲りて、己が儘に吹くとき、之に躰だを當てゝ、即ハち空氣を悟ることを得るなり。然れど、又た其の熱つくなり、冷たくなるとによりて、好し假令ひ少さかの風なきときにても、又た空氣を知ることを得る也。

今ま冱寒きびしき冬の日に、火鉢をがん〳〵と焼いて居つたる部屋の內より、偶と家の外に出でゝ見るべし、乍まちヒヤりとして、直樣、身躰に非常の寒さを感ずべし、之は

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

何より來るか、汝ぢの足には下駄を穿たり、何如に土が冷たくとも、足を傳はつて來るにはあらず、何如に天地四方が冷たくとも、此の天地四方が汝ぢの躰だに着きたるにもあらじ、然らば、何處よりして、此の寒氣は來りたるや、即はち之れ部屋の内の空氣は溫たかにして、部屋の外の空氣の冷たかりし故ならん、左らば、此の冷熱によつて、容易に空氣なるものゝ實に存在して居ることを承知し得べし。」

寒暖計の事

左れば、空氣は斯の如く熱つくもなり、冷たくもなる、吾々之を感じては承知すれども、目を以ては見ることを得ず、只だ彼の寒暖計と云へるものにて、之を測り知るとなり。

空氣冷熱の元因

扨て、空氣は、此の樣に、或は熱つくなり冷たくなると云ふ、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の事

部屋に於けると同じと云ふ事

然し、此の元因は、何によつて然るにや、抑も之を熱するの熱は、何處より來りて、空氣は又た何如にして之を得たる乎。

其の由緣何如んと問ふには、再び前の部屋の事を申すべし、即はち、外の空氣は、那の樣に冷めたきに、部屋の内の空氣は、何故左樣に温かなりしやと云ふに、即ち、部屋の内には、炭火熾んに起つてありしゆへなり、此の炭火よりして熱が來りしゆへならん、左らは、之によつて明白に知らるべし、外の空氣の熱つくなるは、即ハち太陽と云へる、天にかゝる大ひなる炭火の如きものよりして、其の熱が來るゆへならん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

太陽變りなくして空氣に冷熱あるゆゑん

抑も太陽よりして熱が來るとし、而て一年三百六十五日、一日として太陽の出で玉ハざるとなしとすれば、何故、左樣に熱つきときと冷たき時との相違ありやと問ふ人あらん、之に答ふる前には、汝ぢ先づ其の右の手を伸して、日向に當てゝ見るべし、眞に心、地よく温、かに感ぜらるゝならん、然し今ま一冊の本を取つて、此の右手と太陽との間だに入るれば、今まで温たかなりし者が、直ちに冷やかを感ぜらるゝに至らん、之れ即ち太陽には變ハりなけれども、其處よりして發し來る温熱をバ途中にて遮ぎり止むるものゝあればならん、由て思ふに、彼の空氣の或は熱つくなり、或は非常に冷やかに成ると、即ハち亦た此樣の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

空氣の濃淡及び方向の直斜によつて熱冷ある事

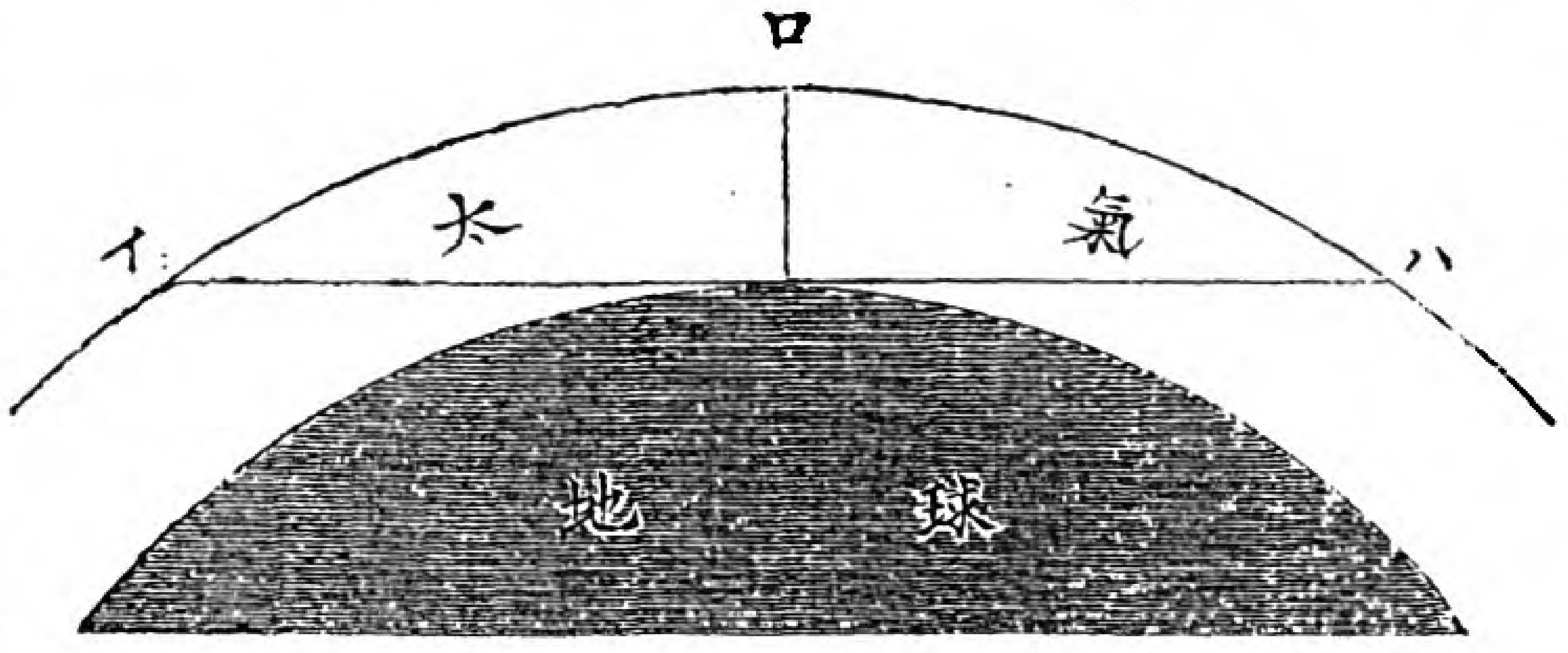
元因に基ひするものと知らるべし。見よ今まで赫々として輝きたる太陽の熱、まことに熱かりしに、一天にはかに雲を起して、之れより急に冷やかに覺ゆるが如きとあらん、之れ即ち、雲と云へるものが、途中にて太陽の熱を遮ぎり止めたるに由る也。

此外か、太陽の熱は、數万億里のアナタより旅びして、參るものゆへ、其の地球に達するまでには、色々の物に觸るゝとあり、之によつても、亦た實際その熱を失ふに多少の相違あるとなるが、取分け、其の旅し來る空氣が濃厚なるときは、甚ハだ多く熱氣を失ひ、空氣淡薄なるときは、之を失ふと少し、又た、太陽の光り眞直に來るときは、其熱つよく、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

斜に來るときは、其熱弱いし。正午の太陽は、甚いだ熱くして、朝夕は彌よ冷やかなり、又た、曇つて鬱とうしき天氣には、空氣濃厚なるゆへに、太陽の熱左程に感ぜざる類、一に皆な之れなり。

圖中太氣とあるは、空氣を總稱して云ふと也。イは朝日。ロは正午。ハは夕方なり。朝夕は斜めに來るにより熱の少なきとを證するの圖なり。



夏の冬よりも熱つきは、亦た之と同樣の理にして外の譯あるに非ず、即いち、夏は、太陽の光り眞直に來り、冬は斜に來るようの次第と成り居るが故なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

曇りたる時及び夜間多少の温氣あるは同故なるかの事

然し、茲に不思議なるは、凡そ熱は如此く太陽より來るものにて、此の熱が途中にて遮ぎり止めらるゝとき、則ち此の熱最早來らず、直樣に寒く感ぜらるゝと云ふ如き理由なるに、實際は大ひに然らず、曇つたる晝と云へども、隨分に温かなる事あり、太陽なき夜と雖ども、相應の熱あるは何故ぞ。

北の由緣の事

之は、今ま、土瓶の湯を熱くして、手も付けられぬ程に成りたるものが、之を暫らく放置すれば、直ちに冷たくなるの理より推せば、明らかに分るべし、即はち、夏天炎暑の頃ろには、土地も何物も非常に熱くなるとあれども、乍ちまちにして又た此の熱氣を發散して、冷たくなるべし、左れば、此

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の物躰は、斯くして冷たくはなれども、之れより發したる温熱は、空氣の内に吸ひ込まれて在るにより、其の空氣は即ち左程速やかには冷たくならぬものなり。故に夜と成りては、晝の内に温かくなりたる、物躰より發散する熱氣を取り、又た曇天と成りては、日の輝いたる時に温かくなりたる物躰より發散する熱氣を取り、斯樣にして、空氣彼自身は、尚は暫らくの間だ左程に冷却もせざると也。而して、又た空氣中に濕氣の存するによりて、斯く色々の物躰より發散する熱氣を、相應に止め置くの効能あり、若し空氣中に濕氣の存すると甚はだ少なきときは、物躰より發散する熱氣、自由我儘に飛び去つて、少しも容赦する所ろ

六〇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なきゆへ、物躰は大相に速やく冷へ渡り、又た空氣は其の割りに此の熱氣を保つとも出來す、即ハち暫時にして、甚ハだしく冷たくなるなり、左れば、濕氣多き地方の夜は、彼の乾ハいたる砂漠邊の地方の夜よりも、遙かに温かなり、又た曇つたる夜は、晴れ渡りたる夜よりも、其の温氣の高きなれど、一に皆な此の理由に因るなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

エリヲット女史

巾幗にしてシエクスピアと成り一枝天下を動かすの小說を作る

ゼヲヂ、エリヲット女史の傳は女學雜誌第百九號に見えたり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○子供の話し

第六回　カンとクッドの話

英國の首府ロンドンの某市街に一人の少年がありましたが平生色々と物事を企てますが何時も自身の力の足らぬことを嘆くのみにて更に一事を得なしません夫故人々綽名して彼をクッドと申しましたそは英語にてクッドとは能ひしと云ふ字にて若し云々の力ありしならば云々の事を成し能ひしならんと云ふ場合に用ゆる故であります又同じ市中に一人の乙女がありましたが其異名をカンと申しました其故を聞ますに英語にてカンとは能ふと云ふ字にて其乙女は何事によらず力の及ふ事件は何時にても爲すの僻がありましたからであります或る小寒き冬の朝クッドは散歩の爲にと云て行ましたが甚だ失望の様子にてア丶僕が力にて出來るならア丶僕に金と力とさへ澤山に有れば是も彼も思ひ通に成るものをと獨語十回許續けました處にカンは表の戸口を押し開き何かお使に出掛ました

カンは乙女であつてクッドに比べますれば身分も賤しくて衣食も惡く教育もなきものでありましたが戸口を出るや四方をも顧ず一散駈りに走りました走る際中カンは不圖立ち停まり蜜柑の皮を拾ひ揚げこの凍りたる人通多き道筋に蜜柑の皮を棄るとはゝー〳〵危

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

憸的惡戯よとつぶやきながら又走り行きましたがやがて密柑の皮を投げ棄てつゝ道行く數人の童女におひつき復立ち留りて孃さん汝の抱て居らつしやるお子さんは幾年です可愛らしい落さぬ様よよく氣をお付なさいよ嬰兒の時の怪我は一生の疵になりますからと申ました處が童女は此の子は妾の弟で生れてまだ一年半に足ませんがモーよく歩みますよろうして妾は落したとはありません常によく氣を付て居ますといらへますれば他の童女も傍より妾等もよく氣を付て居ますと異口同音に叫びましたカンは又語を續で汝か轉倒ならばお子さんも汝と共に怪我を致ましようそれに汝は密柑の皮を道よ投るとは氣のきかなひとではありませんか密柑の皮はよく滑るものではありませんかと詰ましたら一人の童女は妾は一度しか密柑の皮で滑り倒轉たとはありませんと申ましたがカンは問ひ返して其一度は數度の價値を致しはしませんかと云ば童女はそうです妾は其時妾の腕を摺り破るやら持て居たコップを毀すやら致しましたと答へましたソコデカンは汝等市街をお歩行なさるときに一番餘計に密柑の皮を拾ひなさつたお方には二錢づゝを褒美としてあげましやうと申しましたら遂に童女等も再び密柑の皮を道に棄てなひと云ふ約束を致しましたからカンは大に喜んで其處を去て行きましたが此時クッドも亦他の途中で密柑

六四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の皮の散り居るを見出しまして申しまするにはアヽ恥づべきかな此の首府にして此の處行を有罪の處行となすことの出來ぬとハ何んと恥づべきことではないか此の惡戲の爲に二三の怪我人なき冬とてハなきものを僕が市民を支配するの位地に居市民を諭すか又ハ罰して此の所業を禁ずることの出來るならば僕の喜悅何かハ之に若ん併し惜ひことにハ希望ハ力の上に出て愛情ハ……と云折に一人の身長高き擔夫背に石炭の袋を負ひ御免と云ふて通り過ぐれハクッドハ又語を續ひで然り〳〵實に奇躰だよ人間の胸中に許多の希望あるも之を達するの方便がないとハ甚だ不思議だと獨り低語て居ましたが不意の物音に驚かされて顧れば哀れや以前の擔夫ハ蜜柑の皮に滑りたりと見え舖石の上に倒れ石炭ハ頭の上に積み重り人々走り來りて或ハ石炭を取り或ハ擔夫を助け起すものもありましたがクッドハ之を視て獨語して申しまするには實に憐むべきの塲合かな僕に權柄あらば法を發して此の處行を禁せんものに禁すへきことを知りなから禁するの力なき程嘆かはしきことはなしダガ彼の擔夫ハ眼眩蹴足折れ一生跛者となりしならんマー斯ふ云ふ塲合にハ誰しも天子や立法官となりたいと云ふ希望を起すも道理じや詩人などハ人間の災害の中にて法律の力で平癒するものハ甚だ僅少だと云ふが僕の考にてハ若し善良の法律さ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

へありしならば此の擔夫ハ數週間も病院に閉ち籠められ妻子ハ飢餓に苦しむのみか幸で怪我ハ癒るとするも一生跛者となりて妻子の厄介物となるの代りに今も尙大健康にて働き居たるならんと申しました。

斯くてクッド――ハ獨語しつ行き居りましたが四輪馬車の來りましたのを見て忽ち之れへと乘りましたが馬車ハ瞬間にロンドンの市街盡處新築の家屋打ち並びて戸口の前にハ煉瓦石を積み立て煉瓦灰の臭氣ハ近所近邊の空氣に傳染れり市中を右往左往と廻り出て遂に結構美麗なる別莊此處彼處と白屋の間に點綴したる片田舍へ來りました但見れば表門の柱に勞症患者療養所と筆太に書たる表札ありクッド――ハ之れを見て此の類の仕組ハ赤貧者に取てハ至極幸福のもので通常の病院よりも遙に功驗が多ひだから僕の力の及ぶことならば僕ハ高名手柄となる外の事業をなさんよりハ寧ろ此の類の療養所を設立するハ僕の願望である實に赤貧者の中に年々勞症患者の増加するのを見れば憐愍の情に堪へられない併し之をなすの力がないから徒に赤貧者ハ千辛萬苦を見て嘆くばかりだ僕の身分と云へば漸く自分を支へ自分を慰め得る位なれば僕の願望を滿足せしむることが出來ない僕ハ自身に之をなすの資力さへあれば勇んで此の擧を思ひ立んとハ願へども悲ひことにハ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

僕の願は何時も力の上に出るからと獨り心の中に思ひ續けました折しも四輪馬車は不意に立ち止まりました折身に新に洗濯したる衣服を着たる一人の男が來りまして其内に場所のあきはないかと尋ねました切符賣夫はイーエ一つもあひて居りませんと答へながら車の内へ振り向き乘客諸君の中誰か外に出ることを好むお方はありませんかと申しますれバクッドは微笑ながら何に好むとな此の風の寒き日に誰が出ることを好む者ぞ僕は幸いて未だ風邪を病たことなし左りとて故意風邪を病くことを好みはないと申しました切符賣夫は話を續けて茲に一人病氣であつた御方で内へ這入たひと申すお客がありますから若し乘客諸君の中に外へ出るお方があれバ至極都合がよひと思ひましたからでありますと云ひつゝ其人を視るに衣服は寒さを禦くに足らなひと見へ時々咳嗽をなしつゝありましたが内からは何んとも返答はありませなんだそこで其の人は　私は直降りますから立て居ても宜敷あり升と云ひつゝ車へ上りました切符賣夫は自分のケットを其人に貸て着せ鞭を以て以前の療養所を指つゝ貴客は彼處よりお出だと思ひますが違ひますかと問バ其人は謝汝汝までに御面倒を掛けまして、私は病氣で療養所に在ましたが餘程よくなりました皆樣がよく注意さへすれバ不日全癒するから冷却ぬ樣に注意せよと申しまし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たと答へました切符賣夫ハ此處ハ貴客には少しく寒くて風がひどくありますと申しました其人ハ寒さに堪へ兼ね身震なしますとも更に不平を鳴しませず時々咳嗽をなす毎に餘程病氣の癒たことを喜んで居りました閑話休題此時カンハ用事を終ひ晝食の爲めにとて青物店へ這入り何か買ひ居りました處に一個の小女右手に重き筐を携へ左手へショウールを持ちあから入り來りましたのを見て孃さん汝の筐にハ何が入てありますかと問ひますれば小女ハ筐を下に置き凍へ果たる手指を吹きながら晝食用の馬鈴薯でありますお母さんが病氣でありますから妾の外誰れもお使に行く者がありませんと申しましたカンハ重ねてオー寒かろう何ぜ汝ハショウールを着なひで運ひますかと問へば可憐の聲にて餘り筐が重くありますからでありますお母さんがピンでお留なさつて下されましたが筐が重くありますからショウールを踏んで轉倒ましたと答へましたカンハ之れを聞いて氣毒に思ひ此處へお出妾は何も出來なひ者でありますが踏み轉倒ない樣にショウールを着せる位の事は出來ますと云ひつゝショウールを着せ直し小女の住所を尋ねました處がカンの歸り路の方角でありましたからカンはそんなら妾が筐を運んであげましようと云つて小女の筐を携へ小女と共に青物店を立ち出でました此時クッドハ家へ歸りストーブの前

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に坐を占め種々樣々の事につき考へ初めました或ハ湯屋洗濯屋又ハ監獄及び懲治院の改良案を考へ或ハ文明進步の事普通教育の事又ハ人心發達の事殊に貧人の狀態につき思慮を勞し遂に頭腦中に貧人社會の爲に幸福なる新天地を畫きつゝ眠りました然るに之に反しましてカンハ唯二つの仕事をなしました一つハ小女を連れ歸り小女の母の寢床を直しました事と他の一つハ家へ歸りて晝食の用意をなしました事であります。

第七回　王にも勝てる人々

昔し或る王國に忠義ある兵卒ありけり嘗て戰場に出でゝ大なる軍功ありしも王これを賞し玉はず僅かの旅費を與へて歸らしめました何をしようと云ふにも資本なければ先づこの王國程の金を得んと思ひ付きしが元より身は賤しき者なれば人の助を受くるより外に致し方もなしと思ひ夫より家を出でゝ林の中を行くに大なる人あり立木六本を引き拔き其上に晝寢して居るこれ屈强の人なりと其人を呼び起して自分の加勢を願ひしに早速承知し直ちに其丸木を肩負ひて母に送り歸り來りて共に連れ立ち行きしに獵人あり的を切りて射んとせり兵卒は何を射るやと問しにこれより二里向の樫の木の葉の上に一匹の蠅か居る其蠅の左の目を射て見んと思しなりと答ふ實にエラヒ目ジヤナ共に事を天下にす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るに足ると加勢を願ひて三人連れ立ち歩み行きしに風もなきに七ッの臼挽車か廻りて居るこれは不思議と思ひながら凡そ二里計り行きしに大なる木の上に一人の男が上りて居て片方の鼻穴をおさへ片方にて吹きて居るそこで前の事が動くは此人が氣を吹くからと云ふことが明つたこれも我輩の友なりと加勢を願ひて共に進みしに道傍の木の下に一本足の人が立て居て他の一本は切り放して其下に置てあるこれ何故と尋ねしに其人は飛脚なるが二本の足では鳥の如く余り早く走り過ぐる故に一本にしてあると答ふさすれはこれも我輩が共に天下に事をなすの人なりと加勢を願ひ五人連れ立ち行く途中口にハンケチをおふひたる人あり其人の口はワニの口の如く大きにして一度口を開きて氣を吐けば四山雲を起すと云ふ不敵者なれは共に計るに足るべしと加勢を願ひて行く程に一ケの標札あり其文を見るに來る何日某場に於て競走を行ふ一方の相手は姫君なり若し能く姫君に勝つ者あらば其賞として迎へて良人となさん若し勝つ能わざれば其首を取ると兵卒はこれを見てこれぞ我が望を達するの好き手段なりと早速仲間と相談して前の飛脚を出すことに決したれは互に條約を結びて後或る隔りたる川より水を汲み來るべしと二人共に瓶を携へ同じ時同じ方角に向ひ同じ場所を出立せり件の飛脚は今日は兩脚を付けて出

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

でし事なれば飛ぶが如く忽ち霧の內に入りたり然るに件の飛脚途中にて疲を覺へ眠りを催したれば道傍に腰打ち懸け目醒め易からん爲め其所に在りし馬の骨を枕とし眠りたり姬君は名立たる走り手にてこれまで誰人にも勝ちしが此の飛脚に勝たれて殘念と思ひしに幸ひ道傍に眠て居るこれ天の惠か我既に勝てりと飛脚の水を反へして飛ぶが如く走り去るこの有樣を見る人は道が遠ければ誰もなけれど只彼の獵人のみ能く見たりそこで味方を敗かしてはならぬと鐵砲を發して飛脚の枕を射たり其音に目醒めて見れば水は散してあり姬君は遙か前に進みて居るされど驚きもなさず起き上り再ひ川に赴きて水を汲元の所へ返りしは姬君より早きこと十分程でありましたそこで全く其日の勝を得ました王は大に心配し姬君も亦賤しき兵卒に敗けて身を任すと思へは殘念なりと嘆き百官も額を集めて評議いたしましたが遂に王は一の奇計を見出しまして彼の六人の者共を一室に招し種々の珍味を與へまして其間に戶を閉し其室の下よりドン〱と火を燃しました其勢で追々室は暖まるをこれは御馳走を戴くからの勢であると思ひしに追々暖る何でもこれは惡るい謀と氣か付き是れは床は鐵の板にて窓も鐵の棒天井も亦鐵の板なれどまた熱氣が行かぬと見えて寒たしこれ幸と彼の大なる口を有てる人口を開きて氣を吐けば忽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ち蒸氣を發す其蒸氣天井の寒き鐵に當り凝りて雨となり下り下より暖まる熱氣を消す王ハモー定めて焼け死せしならんと戸を開き見るに皆〻安全にしてしかも水が入りて寒しと云意外の事に王は呆れモー致し方なしと思ひしに又思ひ付く事あり彼兵卒を呼びて爾が運び去る丈の黄金を與ふるゆへ姫の義は許しくれと申さる兵卒は黄金を得るが目的なれば早速承知し歸りて直ちに諸方の仕立屋を招き十五日もかゝりて一つの大なる袋を縫ひ彼の立木を拔きしと云ふ男に命じて王の前に至らしましたに王は十六人の兵卒に命じて黄金を出さしめしに彼の男は一握にして袋の中に入れまだ足らぬと云ふ顔付を王は見て全國の財を集めて前に供へしに遠慮もなく其中に入れ尚足らざるの思ありしが漸く口を束ねて輕ろげに脊負ひ出でたり王これを見て大に驚き直ちに騎兵に命じて其後を逐はしめしに何所に在りしか氣の強き鼻の大きひ男か片方の穴を押へ片方の穴にて吹其勢に騎馬は天に舞ひ上り地に舞ひ下り風に轉ずる藁人形の如し此の報知を聞く國王は殘念氣にアー致し方もなし彼等は彼等の味方に力を持て居るから致し方なしと云ひました必竟は王が最初相應の褒美を遣わさなかつたゆへの報ひでありります。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

廣告

女學雜誌 第百拾號目次

(社說)日本の女服改良を何如んせん
(論說)勝手向に於ける考案(在獨逸、學士太田稻造君)○家内經濟の大要(神學士木村熊二君)
(叢話)離婚防禦の錦嚢策○細君之病氣○八才童女父を諫む○江の島○鎌倉○辨慶と佳人が欲しひ○細君と下婢の行衛○子供私己の衛生(大澤謙二)○百人一首一口話(鈴木弘恭)
(小說)小說神髓○スコット翁著ケチルチルス
(佳傳)エリチット女史(平野いま女譯)
(寄書)大坂一致女學生徒の文
(小供談)賢こき仕立屋
(新報)東京慈惠醫院○慈善會員慰勞會○婦人矯風會米國に寄附金す○美術展覽會○盲人教育會○女訓導○產婆○肇修學舍○仙台の女學校○機到舍○婦人英語會○上毛婦人教育會○藤岡婦人教育會○婦人令德會
(海外女報)獨逸の女權○日本女子專門學校○婦人禁酒會員の接吻
(附錄)万國女子大會の景況錄

女學雜誌

毎號の記載項目大抵上に由て推了せらるべし。毎土曜日に發行し一册定價五錢毎號二十四頁以上あり精密の圖畫面白き小說有益の社說爲めにある叢話心を高くする佳傳世親に大切なる子供談の種天下日本中の女の景況内外諸學士の論說等を載せたり

有益書籍廣告

婚姻論 (橫山雅男君著)

右は婚姻に關する法律上、道德上、修身上、國政上、の心得を論述したる議論明細確實有益の著書也

一册三百六十頁洋本仕立一册三十五錢にて郵稅十四錢

東髮案內 (渡邊鼎君著)

右は東髮を日本に輸入し初めて其法を傳へたる元祖渡邊君の著作にして細密なる圖を數多加え且つ田口卯者君の結髮沿革を附錄としたる當今切要の著書也

一册五十頁製本美麗定價十五錢郵稅四錢也

東京日吉町 **女學雜誌社**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案內新設の事

女子に職業を與ふる事は當今甚だ緊要と存じ候ところに世にある慶安と云へるものには弊害尠からず又高等の人々は周旋の便利すこしも無之甚はだ殘念と存ず因て吾社は此度餘暇を以て此等の人々の便利を圖り今後女學雜誌の廣告欄内に交詢案內の一部を設ふけ女子の職業に就くの都合を計りたく希望せり

交詢案內の規則

此の案內は吾社員が餘暇を以て致すと故手數料等は一切申し受けざるは勿論なりされば依賴の人々も決して催促がましき事を申越されざる樣預め願置候事

女教員、うば、こしもと、奉公口、其外さまざまの女の職業につき雇ひたしと思ふ人及び雇はれたしと思ふ人々は其由を細かに申越さるべしさすれば其趣を無名にて番號を付し女學雜誌にて廣告すべき事

雇ひ主及望み手は此の廣告を見て第何號の口へ御世話ありたしなど勝手に申し越さるべし左すれば吾社は其間に立ち双方へ申送り相談と〻のひたらば喜びのめぐみとして廣告し一の女職の道を開きたる事を姉妹方と共に祝ふべき事

前申す如く手數料は一切要せざれども雇ひ主及望み手の双方へ一應の問合せと其後ち否やを返事するとにより少くとも三四回の郵便を出さずばなるまじければ双方とも御依賴の初めに郵便切手十錢を封入して申越されたき事

東京京橋區日吉町　女學雜誌社

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

持主兼編輯人　東京々橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

東京毎次會刊行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY